

万葉の川心

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

大伴宿禰家持の作れる歌一首(巻第六 一〇三五番歌)

田跡川の滝を清みか古ゆ

宮仕へけむ多芸の野の上に

友人に、「写真機忘れた。」と言って、吹き出された。「それって、カメラのこと?」「衣紋掛け、ないかしら。」「ハンガーでしょ。いつの時代の言葉なの。」時折、自分の中から明治の風が吹く。生まれたときから祖父母と暮らしていたのだから仕様がな。若いときは恥ずかしかったが、今では誇らしささえ覚える。「明治生まれ」の女性には、共通の何かが流れているからだ。芯の強さ、底に秘めた熱情、激しさ、心意気、気概。祖母を思えば読み書き・地理は夫任せで、書くのはカタカナだけ。ことわざだけはたくさん覚えていて、昔の人の言うことを固く信じていた。それでも「夫について行きます」だけじゃない。借金して大きな家を買ひ、上等の繭を育て上げた。先祖代々の土地を売って子どもたちの住む東京へ出たのは六〇歳。いつでも祖母が決断し、保守的な祖父を説得し倒した。何の学問もないけれど、信じる心は強かった。そうして必ず次の道を切り拓く。切り拓いては幸せになっていく。くよくよする暇もなく、多少の痛みは覚悟の上。なぜそんなに強くなれるのだろう。祖母はいつまでも若かった。生き方そのものが若かった。老いてま

すまず我が道を行く人だった。

「田跡川の激流があまりに清らかなためか。昔からここに宮を造り、長く人々は仕えてきたのだろう。多芸野のほとりに。」奈良時代、滝は激流のことで、今の滝のことは「垂水」と言った。田跡川の滝は岐阜県養老郡養老町養老公園の養老の滝付近と言われ、養老町に上多度の地名が残っている。川はこの滝に発し、養老町を経て揖斐川に注ぐ養老川である。滝のそばに降りていくと、そこは神々に守られているかのように荘厳で清らかだった。万葉人が「昔から老を養う若返りの水」という程、気の遠くなるような古から清くあり続けている。染み付いた全ての毒素を流してくれる勢い。無になって、また新たに何かが満ちてくる力強さ。そこにいることが幸せと思える。だからこそ宮を造り、皆で仕えたのかもしれない。

古語辞典を見て、「老い」のつく言葉の多いのに驚いた。晩年に一花咲かせることを「老の入舞」というそうだ。祖父が近所のおばあさんと立ち話をしていた時のこと、祖母は真剣にやきもちをやっていた。恋心に老いはないのだと妙に感心した。八十にして漢字に初挑戦し、私に「御年玉」をくれた。もう少し背筋を伸ばして生きていこうかと思う。あなたの血が流れているのだから。

